

# 南九州で採集されたトウガタガイ科貝類 —ウスズミイトカケギリとマルウスズミイトカケギリ—

三浦知之

〒 880-0035 宮崎山下北方町平田

## Abstract

Two species of pyramidellid mollusks were collected from Southern Kyushu: *Turbonilla cura* Nomura, 1937 and *T. clessiniana* Nomura, 1938. Their shell and soft part were reported. They differ from each other by the height ratio to the breadth of wholes; about 59–65% in the former and 66–71% in the latter.

## はじめに

主に宮崎県と鹿児島県の海岸生物を調査し、出現したトウガタガイ科などの希少な貝類を記録してきた(三浦ほか, 2012; 三浦, 2020a, b, 2021)。得られた標本を宮崎県総合博物館に登録するため、現在再検討を行っており、前報に続き、南九州の未記録種等を報告する。本稿では鹿児島県と宮崎県で生体の得られたトウガタガイ科巻き貝2種を報告する。

## 材料と方法

材料は、2007年3月から2020年4月までの間に鹿児島県と宮崎県の干潟や海岸で採集した。海岸から生きた状態で研究室に持ち帰って、可能な限り軟体部を解剖顕微鏡下で観察した。必要に応じ、超音波洗浄機を用いて付着物を除き、70% Alcoholに保存して、殻の形態を観察した。軟体部の形態や部分用語は、Hori and Kuroda (2002) および Høisaeter (2014) に従った。

トウガタガイ科 Pyramidellidae Gray, 1840

Turbonillinae Bronn, 1849

イトカケギリ属 *Turbonilla* Risso, 1826

## ウスズミイトカケギリ

*Turbonilla cura* Nomura, 1937

(Figs. 1A–E)

*Turbonilla (Turbonilla) cura* Nomura, 1937, pp. 67–68, pl. 14, figs. 81a, b.

ウスズミイトカケギリ 堀, 2000, p. 713, pl. 355, fig. 60; 三浦, 2008, p. 151, 4 photos; 堀, 2017, p. 1110, pl. 412, fig. 11, as *Turbonilla cura* Nomura, 1937.

**採集記録** 2007年3月21日宮崎市一ツ葉入り江西側南部(1); 2007年3月22日同所西側北部(3); 2010年4月1日宮崎県門川町庵川西入り江(1); 2010年7月11日同所(1); 2020年4月25日同所アマモ場(1); 2008年6月20日鹿児島県指宿港内(1)。

**形態・分布・生態** 宮崎県門川町庵川東入り江から得られた生体標本は、殻高3.8 mm、殻幅0.9 mmであった(Fig. 1A)。指宿港内で採集された個体は殻長4.7 mm、殻幅1.2 mmであった(Fig. 1D)。胎殻は2階が確認でき、殻軸に対して90°異旋する。得られた標本はいずれも小型で殻長3–5 mm程度である。後生殻の螺層は門川町の個体では9階で(原記載は11階)、殻はやや薄く、透明感があり、軟体部が透けるため、軟体部が確認しやすい(Figs. 1A, B)。螺層は幅に対して高さが約59–65%で、トウガタガイ科では標準的かと思われる。螺層には色帯がなく、各螺層には体軸から約5–10°傾いたやや太い縦肋があり、体層

Miura, T. 2021. Records on pyramidellid mollusks collected from Southern Kyushu, Japan – *Turbonilla cura* Nomura, 1937 and *T. clessiniana* Nomura, 1938 –. *Nature of Kagoshima* 48: 45–47.

☑ TM: Hirata, Kitakata-machi, Miyazaki 880-0035, Japan (e-mail: miurat@cc.miyazaki-u.ac.jp).

Received: 1 July 2021; published online: 2 July 2021; [http://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK\\_048/048-009.pdf](http://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_048/048-009.pdf)

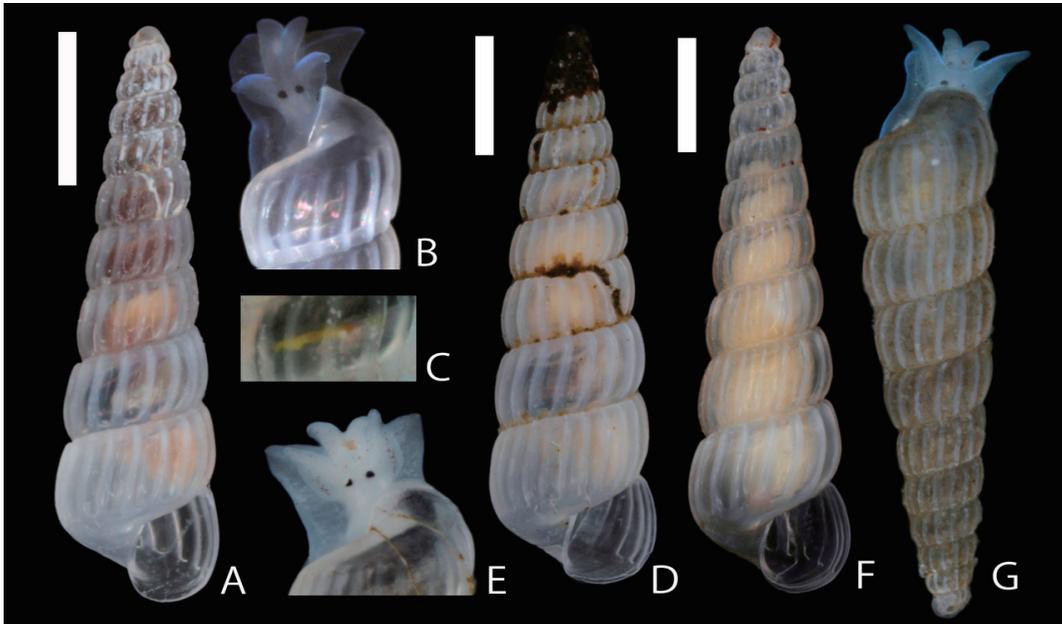


Fig. 1. A. *Turbonilla cura* Nomura, 1937 collected from Iorigawa inlet, Miyazaki Prefecture, ventral view; B. The soft body of the same, dorsal view; C. Enlarged penultimate whorl of the same showing its pigmented mantle organ, dorsal view; D. The same species collected from Ibsuki Port, Kagoshima Prefecture, ventral view; E. The soft body of the same, dorsal view; F. *Turbonilla clessiniana* Nomura, 1938 collected from Iorigawa inlet, ventral view; G. The living specimen of the same, dorsal view. Scale for A, D & F = 1mm.

では15–20本程度である。縦肋は螺層周縁で消失し、殻底には達しない。このため、殻口の内側から縦肋の先端が明瞭に確認できる (Figs. 1A, D)。縦肋より肋間が明らかに広く、縦肋の2倍以上に達することがある (Figs. 1A, D)。肋間には明瞭な螺糸は見られない。殻口は扇形で、直線的な内唇と殻底のラインが角張り、外唇は円弧状。軸壁は確認できない。

頭部と腹足は透けた白色で、頭部触角は三角錐状で前後に翼状の張り出しがあり、中央部がやや高い (Figs. 1B, E)。触角および口吻基板の縁辺には黒い斑紋が確認できる (Fig. 1E)。触角の先端腹側には繊毛瘤 ciliated pad が確認できる。触角の付け根に円形の眼が1対あり、前側が円弧状に凹むこともある。両眼は眼1–2個分程度離れて位置する。眼の前後には、白色の腺状の斑紋が散在する。口吻基板は細長く伸び、先端中央に浅い窪みがあり、左右2つの円弧状の先端を持つ。腹足は匍匐状態で先端が左右に拡がり、左右の突出部は尖らない。透明な外殻から透けて見える軟体は、生体ではほぼ黒一色であるが、一部に白い部

分を持つ。黒い軟体部は固定した標本でも次体層付近に確認できる (Figs. 1A, D)。また、体層あるいは次体層には赤い斑点を一つ備えた黄色の外套器官を確認できる (Fig. 1C)。

本種は宮崎県宮崎市の砂質干潟や門川町あるいは指宿港内のアマモ場周辺の砂質底に見つかり、九州でも広く記録されると思われる。2007年3月22日宮崎市一ツ葉入り江で採集した生体の写真は三浦 (2008) にも掲載され、生時の殻内の軟体はほぼ全体が黒い。

### マルウスズミトカケギリ

#### *Turbonilla clessiniana* Nomura, 1938

(Figs. 1F, G)

*Turbonilla clessiniana* Nomura, 1938, pp. 56–57, pl. 10, figs. 80a, b.

マルウスズミトカケギリ 堀, 2017, p. 1110, pl. 412, fig. 2, as *Turbonilla clessiniana* Nomura, 1938.

採集記録 2009年6月7日宮崎県門川町庵川

東入り江アマモ場 (28).

**形態・分布・生態** 門川町庵川東入り江から得られた標本は、最大で殻高 5.0 mm、殻幅 1.1 mm であった (Fig. 1F). 胎殻は 2 階で、殻軸に対して約 105° 異旋する。後生殻は 9 階で、殻はやや薄く、透明感があり、軟体部が透ける (Fig. 1F). 各螺層には体軸から約 6° 傾いたやや細い縦肋があり、体層では 20 本程度である。螺層の側縁は丸く、縫合は深く括れる。螺層は幅に対して高さが約 66–71% であり、貝は細長く見える。縦肋は螺層周縁で消失し、殻底には達しない。このため、殻口の内側から縦肋の先端が明瞭に確認できる (Fig. 1F). 縦肋に比べ、肋間は広く、2 倍以上の幅である。最初の数螺層では肋間が狭くなる (Fig. 1F). 肋間には明瞭な螺条は見られない。殻口はほぼ長楕円形で、弱い内唇と殻底および外唇がきれいな長い楕円を描く。軸壁は確認できない (Fig. 1F).

軟体部は透けた白色で、表面には黒く小さな斑紋が散在する。頭部触角は三角錐状で後方に強い翼状の張り出しがあり、前方部がやや高い (Fig. 1G). 触角の先端は丸く、先端腹側にはやや不明瞭な繊毛瘤 ciliated pad が確認される。頭部中央に円形の眼が 1 対あり、眼 2 個分程度離れて位置する。眼の後方には、白色の腺状斑紋がある。口吻基盤は細長く伸び、先端中央に深い窪みがあり、左右が伸張し、2 本の触手状の長楕円端となる (Fig. 1G). 腹足は匍匐状態で先端が左右に拡がるが、角には丸みがある。体層内部の外套器官は外殻を被う付着藻類により、確認できなかった (Fig. 1G). 他方、固定した標本の透明な外殻から透けて見える内部の軟体には体層と次体層付近に黒色の部位がなく (Fig. 1F), ウズミイトカケギリとは明らかに異なることがわかった。

本種は、フィリピンなどにも分布し (Hardy, 2021), ウズミイトカケギリに比べて、明らかに概形が細長い。原記載やタイプ標本の写真 (堀, 2017) に比べて、宮崎県の標本は縦肋の間隔が広いが、28 個体の標本には肋間、縦肋の幅、螺層

の高さ、螺層周縁の丸みに多少の変異があり、観察や撮影によっても多少の幅があるので、総じて原記載や堀 (2017) の記述に一致すると考えた。

本報告では殻形態のよく似た 2 種のイトカケギリ属を紹介した。紛らわしいが、縦肋の太さや傾きおよび螺層の高さに違いがある。軟体部もよく似た頭部を備えているが、体層付近の黒い軟体部があるかどうかの違いがあった。

## 引用文献

- Hardy, E., 2021. Hardy's Internet Guide to Marine Gastropods (& Near Classes) release 45.04. <<http://www.gastropods.com/index.shtml>> (2021.06.13).
- 堀 成夫, 2000. トウガタガイ上科. in 奥谷喬司編集「日本近海産貝類図鑑」, 東海大学出版会, 平塚, pp. 702–729, pls. 350–363.
- 堀 成夫, 2017. トウガタガイ上科. in 奥谷喬司編集「日本近海産貝類図鑑」, 東海大学出版会, 平塚, pp. 1105–1123, pls. 408–422.
- Hori, S. and R. Kuroda, 2002. Re-description of *Odostomia oyasiwo* Nomura, 1939 with a comparison with *Odostomia desimana* Dall & Bartsch, 1906 (Heterobranchia: Pyramidellidae). *Venus*, 61: 1–14.
- Hoisaeter, T., 2014. The Pyramidellidae (Gastropoda, Heterobranchia) of Norway and adjacent waters. A taxonomic review. *Fauna Norvegica*, 34: 7–78.
- 三浦知之, 2008. 干潟の生きもの図鑑. 南方新社, 鹿児島. 197 pp.
- 三浦知之, 2020a. 宮崎県のアマモ場で得られた日本未記録のイトカケガイ科貝類. *Nature of Kagoshima*, 47: 133–136.
- 三浦知之, 2020b. ‘生きていた化石’ガクバンゴウナ科貝類の南九州での記録. *Nature of Kagoshima*, 47: 143–145.
- 三浦知之, 2021. 南九州で記録されたトウガタガイ科貝類—ホソイトカケギリ, クラエノハマイトカケギリおよびチャイロイトカケギリ—. *Nature of Kagoshima*, 48: 33–36.
- 三浦知之・三浦 要・富岡 宏・佐伯めぐみ・三橋利恵, 2012. 宮崎県門川町庵川アマモ場とその周辺に出現する貝類, 甲殻類および腕足類. 宮崎大学農学部研究報告, 58: 51–68.
- Nomura, S. 1937. Additional Pyramidellidae from Siogama Bay, with remarks on the molluscan fauna, especially Pyramidellidae from Sagami Bay; being a comparative study. *Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletins*, (13): 11–107, pls. 4–14.
- Nomura, S. 1938. The third report on Pyramidellidae based upon the specimens preserved in the collection of the Saito Ho-on Kai Museum. *Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletins*, (16): 1–88, pls. 1–15.
- WoRMS, 2021. <<http://www.marinespecies.org>> (2021.5.17)